

# 東大寺大仏左脇侍と如意輪観音信仰

清水紀枝

はじめに

あるが、当初は片足を踏み下げた半跏の坐勢であったことが判明している。

奈良・東大寺大仏殿の本尊盧舎那仏の両脇には、施無畏印・与願印を結んで結跏趺坐する二軀の像が安置され、右脇侍は虚空蔵菩薩、左脇侍は如意輪観音と伝えられる(図1)。大仏殿は鎌倉時代と江戸時代の二度、兵火により焼失しているため、現在の両脇侍は十

この左脇侍は『図像抄』をはじめとする平安後期以降の密教図像集に、滋賀・石山寺の本尊と同じ形式の如意輪観音像であると記される。ところが、このように施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた如意輪観音像は、経典や儀軌に説かれず、日本以外に作例がない。後述するように、石山寺本尊の本来の尊名は「観音」であり、平安時代以降、石山寺に進出した醍醐寺僧の影響によって「如意輪観音」とよび変えられたことが指摘されている。

本稿では、石山寺本尊に関する先行研究をふまえた上で、この特異な「如意輪観音」像が石山寺で成立し、さらに東大寺へと伝播した経緯について考察を加えたい。



図1 東大寺大仏左脇侍

八世紀の再興像で

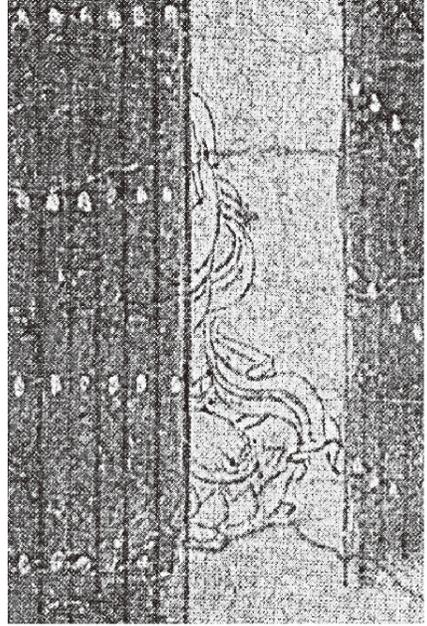


図2 『信貴山縁起絵巻』巻三  
東大寺大仏左脇侍

### 一 東大寺大仏左脇侍の当初の坐勢と尊名について

天平十五年（七四三）に聖武天皇が布告した東大寺大仏発願の詔には、脇侍像について一切言及されていない。『東大寺要録』や『七大寺巡礼私記』といった十二世紀以降の史料は、脇侍像の造立開始を天平勝宝元年（七四九）四月八日のことと伝えるが、詳しい造像事情については不明である。

はじめに述べたように、現在の大仏左脇侍は江戸時代の再興像であり、右手を施無畏印、左手を与願印として結跏趺坐している<sup>①</sup>。その一方で、二度の兵火に見舞われる前の左脇侍の姿を伝えるものとして、十二世紀後半に制作された『信貴山縁起絵巻』巻三が注目されてきた。ここには、東大寺大仏殿の正面が描かれ、扉の隙間から



図3 『図像抄』石山寺本尊

左手は現在と同様、与願印を結んでいたが、坐勢は結跏趺坐でなく、片足を踏み下げていることが判明する。

さらに、十二世紀前半に成立した『図像抄』巻第六「観音上」の如意輪観音の項にも、注目すべき記事がみえる。石山寺の本尊如意輪観音像について述べる部分に、

従昔所造画二臂像。皆右手作施無畏。左手於膝上作与願印垂下。左足坐盤石上。大和国龍蓋寺丈六如意輪像亦同之。東大寺大仏殿左方如意輪亦同之垂下左足<sup>②</sup>。

とある。つまり石山寺本尊は右手を施無畏印、左手を膝上で与願印とし、左足を盤石の上に踏み下ろした二臂像であるといい、その図像を載せている（図3）。重要なのは、龍蓋寺、すなわち現在の奈

左脇侍の一部がみえる（図2）。踏み下げた左足を踏割蓮華座に乗せ、左の掌を外に向けて膝上に垂下していることが確認できる。これにより、

良・岡寺の本尊や、東大寺大仏左脇侍もまた、同じ姿をした如意輪観音像であると記される点である。『信貴山縁起絵巻』やこの『図像抄』の記事をふまえると、当初の大仏左脇侍は、施無畏印・与願印を結び、片足を踏み下げた像であったと考えてよいだろう。

現在の石山寺本尊は承暦二年（一〇七八）の火災後に再興された、十一世紀末ごろの様式を示す丈六の木彫像<sup>③</sup>で、左手を与願印として右手に宝珠を載せた蓮華をもち、左足を踏み下げた形式をとる。右に引いた『図像抄』の記事は火災前に安置されていた旧本尊について記したもので、天平宝字五年（七六一）から翌年にかけて、良弁（六八九〜七七三）の指導下に造像されたことが明らかとなっている<sup>④</sup>。

また現在、岡寺の本堂には右手を施無畏印、左手を与願印として結跏趺坐する塑像の本尊が安置されている（図4）。大部分はす



図4 岡寺本尊

に後補に  
変わり、  
頭部の一  
部にのみ、  
奈良時代  
の造頭当  
初の部分  
を残して  
いるとい

う<sup>⑤</sup>。昭和五十二年に本尊の台座の調査が行われ、本来は結跏趺坐ではなく、石山寺本尊と同じく左足を踏み下げたことが明らかとなった<sup>⑥</sup>。

すなわち石山寺本尊、東大寺大仏左脇侍、岡寺本尊は、いずれも本来、『図像抄』の記述通り、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた姿であった可能性が高い。そして今日も三像は、如意輪観音と称されている。

ところが、施無畏印・与願印を結び、片足を踏み下げた二臂の如意輪観音像は、經典や儀軌に説かれない。如意輪観音は通例、大坂・観心寺本尊（図5）のように、唐・金剛智訳『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』<sup>⑦</sup>等の経説に基づいた六臂の姿であらわされる。つまり、



図5 観心寺本尊

右手の第一手を思惟相として、第二手に如意宝珠を、第三手に念珠を執り、左手第一手は光明山に触れ、第二手に蓮華を、第三手に輪宝をもった姿である。「如意輪」の名は「如意宝珠」と「輪宝」を意味するもので、如意輪観音はこれらの持物の力をあわせもった観音であると考えられている<sup>8)</sup>。しかし、三像が如意宝珠や輪宝をもっていたという記録は見当たらない。

なお唐・菩提流支訳『如意輪陀羅尼經』に二臂の如意輪観音像が説かれるが、左手に宝珠を載せた蓮華を執り、右手を說法印として結跏趺坐する姿であり、やはり『圖像抄』に説く形式とは相違している。

その一方で、そもそも東大寺大仏左脇侍の本来の尊名は、「如意輪観音」ではなく、「観音」であった可能性が高い。左脇侍の尊名の変遷については、田村寛康氏の論考に詳しい<sup>10)</sup>。八世紀の『延暦僧録』や九世紀前半の『大仏殿碑文』には「扶侍菩薩」とあるのみだが、永観二年（九八四）の『大仏殿納物』には「観音」と記されている。そして、嘉承元年（一一〇六）の『七大寺日記』以降、「如意輪観音」と称されているという。

奈良時代の如意輪観音信仰に関わる史料を精査した井上一稔氏は、密部変化観音が多数を占める『西大寺資財帳』や、『東大寺要録』所収の「大仏殿西曼荼羅左右銘文」に如意輪観音の名が見出せないこと、また、道鏡が如意輪法を修したという有名な伝えについても、確実な史料が見当たらないことに着目した。すなわち奈良時代の日

本では密教の変化観音としての如意輪観音への意識はまだ芽生えておらず、本格的な如意輪観音信仰は行われていなかったという<sup>11)</sup>。井上氏の説をふまえると、東大寺大仏左脇侍も、当初は「観音」であり、弘法大師空海が正統な密教を日本にもたらした平安時代以降、何らかの要因によって、「如意輪観音」とよび変えられたことが想定される。しかるに従来の研究において、この尊名のよび変えの問題については、詳しい追究がなされてこなかったようである。

なおこれまで、虚空蔵菩薩と称される右脇侍との組み合わせについても考察が行われてきた。鎌倉時代に成立した原本を写したものとみられる東大寺蔵『東大寺大仏縁起絵巻』卷三には、右脇侍の姿が描かれており、左脇侍とは左右対称の、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた形式であったことが判明する<sup>12)</sup>。右脇侍の「虚空蔵」という呼称については、前述の十世紀『大仏殿納物』まで遡ることのできるもので、右手を与願印とし、半跏に坐す姿が『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』に説く虚空蔵求聞持法の本尊の姿と共通することなどが指摘されてきた<sup>13)</sup>。

しかし、盧舎那仏の両脇に観音と虚空蔵、あるいは如意輪観音と虚空蔵を安置するという経説は見当たらない。小野玄妙氏は、『虚空蔵菩薩經』に虚空蔵菩薩が「若現大身与觀世音」、つまり観音と同じ大きさであると説かれていることに注目したが、これが盧舎那仏の両脇に配された典拠は不明である。また、如意輪観音と虚空蔵菩薩が多くの場合、如意宝珠をもった姿で表されることも、両者

の共通点として注目されてきたが、東大寺大仏の両脇侍が宝珠をもっていたと伝える史料はなく、ただちにこれを根拠とすることは難しい。

この三尊の組み合わせについては、かなり古くから疑問が呈されていたようで、保延六年（一一四〇）の『七大寺巡礼私記』にも言及されている。著者である親通は、まず胎藏界曼荼羅の釈迦院中の釈迦が観音と虚空蔵を脇侍としていることを述べ、次に「観普賢經」等に釈迦と大日如来が同体とあることに着目した。大日如来は廬舎那仏と同体関係にあるから、釈迦と廬遮那仏もまた同体であるとし、このような三尊の組み合わせが成立したものと考えたようである。<sup>16</sup>

しかし、胎藏界曼荼羅は空海が大同元年（八〇六）に初めて請来したものであり、東大寺大仏の両脇侍が、天平時代の造立当初から、これを典拠としていたとは考えにくい。あるいは右脇侍の「虚空蔵」という呼称も、左脇侍と同様、平安時代以降により変えられたものである可能性もあるが、この経緯を伝える史料は見当たらず、今後、さらなる検討を要する。

以上のように、当初の東大寺大仏左脇侍は、石山寺や岡寺の本尊と同じく、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた像であった。そしてその尊名は、平安時代以降、「観音」から「如意輪観音」へとよび変えられた可能性が高いが、その具体的な要因については未だ明らかにされていない。

なお岡寺本尊については江戸時代以前の史料を欠いており、尊名の変遷等を詳しく知ることはできないが、石山寺本尊が如意輪観音と称された背景については、従来、様々な角度から検討が行われてきた。

## 二 石山寺本尊「如意輪観音」像と

### 東大寺大仏左脇侍

正倉院文書中の天平宝字六年（七六二）八月二十七日付「造石山院所労働帳」や、天平宝字六年閏十二月二十九日付「造石山院所解」には、石山寺本尊の尊名が「観世菩薩」「観世音菩薩」と記される。しかし、永観二年（九八四）成立の仏教説話集『三宝絵』以降、にわかに「如意輪観音」とよばれるようになる。つまり石山寺本尊も本来は「観音」であり、十世紀以降、「如意輪観音」とよび変えられたことが指摘されてきた。<sup>17</sup>

ここで注目したいのは、前述の『凶像抄』の石山寺本尊の記事を引用する『別尊雜記』の裏書に「世間以此像号石山様」とある点である。<sup>18</sup>つまり施無畏印・与願印を結び、片足を踏み下げた如意輪観音像が「石山様」と称されていたことが判明する。「石山様」という呼称は、この特異な二臂如意輪観音像の形式が、まさに石山寺において成立したことを示すものと考えられよう。

岩田茂樹氏や徳竹由明氏は、『三宝絵』において石山寺本尊が

「如意輪観音」と称された十世紀頃、石山寺に真言僧の淳祐（八九〇～九五三）が入寺していることに注目した<sup>19</sup>。菅原道真の孫にあたる淳祐は、真言宗・醍醐寺の観賢（八五四～九二五）にしたがって出家した。観賢は醍醐寺の開祖聖宝（八三二～九〇九）の正嫡にあたり、淳祐は観賢のあとの醍醐寺座主となるべき立場にあった。しかし身体に障害があったことから、淳祐はこれを辞退し、石山寺に隠棲して経典の書写や著述に専念したという。

醍醐寺は空海の孫弟子にあたる聖宝が、如意輪観音と准胝観音を本尊として開創した寺院である。聖宝はさらに修行の地である金峰山にも像高六尺の金色如意輪観音像を造立し、聖宝の住房であった延命院には半丈六と等身の金色如意輪観音像が本尊として安置されていたという<sup>20</sup>。聖宝の如意輪観音への特別な信仰が、直系の弟子である淳祐へと受け継がれた可能性は高い。

なお淳祐の如意輪観音信仰の一端を示すものとして、その著作『聖如意輪念誦次第』が注目されてきた<sup>21</sup>。これは本尊に如意輪観音を据えた十八道加行の次第であり、醍醐寺の小野流において今日も用いられている。また、十二世紀の『秘蔵金宝抄』によれば、淳祐は如意輪観音の六臂を六観音に宛て、それぞれに六道を救う力のあることを説いたという<sup>22</sup>。

淳祐以後、石山寺には続々と真言僧が入り、醍醐寺の法流を継承して、石山流とよばれる一派を形成した。徳竹氏は醍醐寺における如意輪観音への特別な信仰をふまえ、石山寺本尊が如意輪観音と称



図6 石山寺六臂如意輪観音像

された背景に、醍醐寺の法流を継承した真言僧の活動があったこと、とりわけ醍醐寺僧である淳祐の石山寺入寺がひとつの契機となったことを指摘した<sup>23</sup>。つまり、石山寺本尊の尊名が「観音」から「如意輪観音」へとよび変えられる過程で、淳祐の如意輪観音信仰が重要な役割を果たしたものと考えられてきたのである。

さらに石山寺と醍醐寺の如意輪観音信仰との密接な関係を示すものとして、石山寺に伝来する十世紀末頃の六臂如意輪観音像が注目される（図6）。この像の調査に携わった井上一稔氏は、とりわけ下彫れの強い顔立ちに着目し、これが十世紀頃の醍醐寺における造像に共通する特徴であることを明らかにした<sup>24</sup>。石山寺と醍醐寺は地理的に近く、人的な交流も行われやすい環境にあった。井上氏はこの像が石山寺に伝来した背景に、両寺の地理的関係と、淳祐の如意

輪観音信仰の影響を想定している。

また福山敏男氏は、このような六臂如意輪観音像の片膝を立てた姿が、半跏形である石山寺本尊と通じるところがあったために、両者が結びつけられたのではないかと推測した。<sup>(25)</sup> 淳祐ら如意輪観音を特別に信仰する醍醐寺僧が、このような像容の類似点に注目した可能性は高い。

なお、石山寺本尊の脇侍の尊名について、『正倉院文書』では「神王」とされるが、『覚禅抄』など平安時代の文献には「執金剛神」「金剛藏王」などと記される。特に右脇侍の金剛藏王菩薩像は、もともと両足を地につけて立っていたものを、後世、切断して足をあげる姿に変更されたことが判明している。<sup>(26)</sup> すなわち脇侍像もまた、平安時代以降に尊名が変更されたものと推測される。近藤謙氏は、これら執金剛神や金剛藏王菩薩、そして石山寺毘沙門堂に伝来する兜跋毘沙門天が聖宝の信仰と関わりの深いことに注目し、醍醐寺が石山寺の造像を主導した可能性を指摘した。<sup>(27)</sup>

以上、先学の研究によって、十世紀の淳祐以降、醍醐寺の法流を継ぐ真言僧が石山寺に入り、本尊の「観音」像を「如意輪観音」とよび変えたものと考えられてきた。しかし、奈良・平安時代における石山寺の状況を伝える史料は乏しく、これ以上詳しいことは明らかにされていない。

一方、前述のように、東大寺大仏の左脇侍は、永観二年の『大仏殿納物』の時点では「観音」、嘉承元年の『七大寺日記』に至って

「如意輪」とよばれている。よって、十世紀末から十二世紀の間に如意輪観音と称され始めた可能性が高い。すなわちこの時期の東大寺においても何らかの状況の変化があり、尊名変更の契機となったことが推察される。

### 三 東大寺別当と醍醐寺

そこで当時の東大寺の状況に目を向けると、まさに十世紀末にあたる永延三年（九八九）、齋然（九三八―一〇一六）が五十一代別当に就任していた。<sup>(28)</sup> 九世紀前半に寺内に設置された東大寺別当は、寺内経営の全般にわたって指導的な役割を果たした寺職である。<sup>(29)</sup> 齋然は宋に渡り、いわゆる清凉寺式釈迦像を請来したことも知られる。

ここで注目したいのは、齋然が淳祐の正嫡にあたる石山寺の元杲（九一四―九九五）から法を受けている点である。前述の通り、淳祐は石山寺本尊を如意輪観音と称し始めた可能性の高い僧である。元杲は醍醐寺において出家し、淳祐から伝法灌頂を受けて、醍醐寺の延命院に住したことで知られる。<sup>(30)</sup> つまり左脇侍が如意輪観音と称され始めた想定される時期、淳祐の孫弟子にあたる齋然が別当として寺内の経営に深く関与していたのである。

つづいて齋然のすぐあと、正暦三年（九九二）に第五十二代別当に就任した深覚（九五五―一〇四三）は、石山寺に住して「石山大

僧正」と号した真言僧であり、淳祐を祖とする石山流に名を連ねている。深覚はその後、長徳四年（九九九）、長和五年（一〇一六）にも東大寺別当となり、計三度の就任を果たしている。注目すべきは、万寿三年（一〇二六）、深覚が如意輪の神呪を以て後一条天皇の御悩を祈り、法験を顕らかにしていることである。

また長元二年（一〇二九）、第六十二代の別当となった仁海（九五―一〇四六）は、醍醐寺小野流の祖であるが、やはり元果から法を受けている。<sup>31)</sup>

真言宗は東大寺と関わりが深く、弘仁十三年（八二二）に空海が灌頂道場である真言院を大仏殿の南に設置して以降、東大寺の密教化が進んだという。<sup>32)</sup> さらに醍醐寺を開いた聖宝が貞観十七年（八七五）に寺内に東南院を建立して以後、東南院の院主や醍醐寺座主が東大寺別当を兼務する例が多くなっている。<sup>33)</sup> 長元六年（一〇三三）の第六十三代別当済慶（九八五―一〇四七）は東南院の僧であり、次の第六十四代別当深観（一〇〇一頃―一〇五〇）は、前述の深覚について出家した真言僧であった。

すなわち東大寺大仏左脇侍が、「如意輪観音」とよばれ始めた可能性の高い、十世紀末から十二世紀にかけて、淳祐の法流を継ぐ真言僧たちが、次々と東大寺別当に就任していたことになる。

また、右脇侍の尊名となっている虚空蔵菩薩もまた、淳祐が重視するほどであったことが留意される。<sup>34)</sup> 右脇侍の尊名と淳祐の関係についても、今後、検討を要するであろう。



図7 『別尊雑記』石山寺本尊

さらにここで、左脇侍を如意輪観音であると説いた図像集の編者にも注目したい。すでに紹介したように『図像抄』には、東大寺大仏左脇侍や岡寺本尊が、石山寺本尊と同じ形式の二臂如意輪観音像であることが述べられる。『図像抄』は保延五年（一一三九）から翌年にかけて、真言僧恵什によって編纂されたことが知られている<sup>35)</sup>が、重要なのは、恵什もまた石山流を継承する僧であった点である。この特異な二臂如意輪観音像に関する『図像抄』の記事は、以後、十二世紀後半の『別尊雑記』および十三世紀の『覚禅抄』に引用される<sup>36)</sup>（図7）。この『別尊雑記』の編纂に関わったとされる守覚<sup>37)</sup>および『覚禅抄』を編んだ覚禅もまた、石山流に名を連ねる真言僧であったことが判明した。

そこで、『図像抄』、『別尊雑記』、『覚禅抄』の如意輪観音の項に目

を向けると、さらに興味深い事実が浮かび上がってくる。『別尊雜記』はその画像の約三分の一を『図像抄』から引用している<sup>38)</sup>。また『覚禪抄』は、先行する『図像抄』と『別尊雜記』の説をふまえながら、原則としてこれらの図像集に載せる画像を省略し、新たな画像を収集する意図のあったことが明らかにされている<sup>39)</sup>。

それぞれの如意輪観音の項に、『図像抄』は計六図、『別尊雜記』は計十図、『覚禪抄』は計九図の如意輪観音画像を収録する。注目すべきは、施無畏印・与願印を結び、左足を踏み下げた石山寺本尊の画像のみ、三つの図像集全てに収録されているのである。

特に、『図像抄』や『別尊雜記』に既に収録された画像を、原則として省略する『覚禪抄』までもが、石山寺本尊の画像を載せている点は重要だと考える。これは、石山流を継ぐ守覚や覚禪が、石山寺本尊およびこれと同じ形式の特異な二臂如意輪観音像を特別に重視していたことを示唆しているのではないだろうか。

『図像抄』、『別尊雜記』、『覚禪抄』は院政期を代表する図像集として知られるが、従来、その編者については小野流や広沢流との関わりばかりが論じられ、石山流との関係についてはほとんど注目されてこなかった。平安時代末期の石山寺は、観祐(一一一〇頃～一一七五頃)や朗澄(一一三一～一二〇八)をはじめ、画像の研究に熱心な僧を輩出している<sup>40)</sup>。今後、これらの図像集の展開と石山流の関わりに留意してゆきたい。

#### 四 如意輪観音信仰をめぐる東大寺・

##### 醍醐寺・石山寺のネットワーク

以上、東大寺大仏左脇侍が如意輪観音と称され始めた時期、淳祐と関わりの深い真言僧たちが、東大寺の経営に深く関与していたことが判明した。加えて『図像抄』をはじめ、左脇侍を如意輪観音とする図像集もまた、淳祐の流れをくむ僧によって編纂されたことが明らかとなった。すなわち左脇侍が如意輪観音と称された背景にも、石山寺本尊と同様、淳祐の如意輪観音信仰が密接に関わっていた可能性が高い。

なお、十世紀末以降に成立した説話類からも、東大寺、石山寺、醍醐寺の密接な関係が窺える。石山寺の造営については正倉院文書に詳細な記録が残り、福山敏男氏により、造東大寺司下の造石山寺所のもとで行われたことが明らかにされているが、その開基の理由や発願者は不明である。しかし十世紀の『三宝絵』以降、東大寺大仏の造立と強く結びついた開基伝承が形成されてゆく<sup>41)</sup>。前述の通り『三宝絵』は石山寺本尊と如意輪観音を結びつけたもつとも早い史料であるが、下巻「東大寺千花会」条に次のような伝えを載せる。すなわち東大寺大仏に塗金するための金を金峰山の金剛蔵王菩薩に願ったところ、現在の石山寺の地にあたる近江国瀬田川の河畔を示現された。そこでその場の石の上に如意輪観音を据えて祈請すると、



図8 醍醐寺六臂如意輪観音像

陸奥国などから金が発見された。よってこの地に石山寺が建立されたといい。

この開基伝承の形成と展開を論じた徳竹由明氏は、金峰山の金剛蔵王菩薩が重要な役割を担っていることにも注目した。<sup>(43)</sup> 醍醐寺の開祖聖宝は金峰山を修行の地とし、如意輪観音像とともに金剛蔵王菩薩像を造立するなど、金峰山に深く関与したことで知られる。<sup>(44)</sup> つまり石山寺の開基伝承に東大寺大仏や金峰山が結びつけられた背景にも、醍醐寺僧が関与していた可能性を指摘している。

さらに十二世紀後半の醍醐寺僧、慶延の編纂した『醍醐雜事記』巻一には、

如意輪堂一字 奉安置如意輪像一鉢 高五尺（中略）此堂御明

油自石山寺為毎年々貢送進之直料米六石八斗二升也。奉進之由來、石山如意輪示現云我者常通而在上醍醐如意輪堂也云々

とあり、石山寺の本尊如意輪観音像が、常に上醍醐の如意輪堂に通っていたと伝える。これにより毎年、石山寺から醍醐寺へ御明油が送られることになったといふ。<sup>(45)</sup>

すなわち『三宝絵』では東大寺と石山寺が、『醍醐雜事記』では石山寺と醍醐寺が、それぞれ如意輪観音を介して結び付けられている。

これらの説話は、十世紀末から十二世紀にかけて、東大寺、石山寺、醍醐寺が如意輪観音信仰を軸とした密接な関わりをもっていたことを示唆しているのではないだろうか。

なお、聖宝が醍醐寺の本尊として祀った如意輪観音像はすでに失われているが、江戸時代の『醍醐寺新要録』によれば、文安六年（一四五〇）に秘仏本尊の帳の中を拝見したところ、二臂の如意輪観音像であったといふ。<sup>(46)</sup> また六臂如意輪観音像の坐勢は、通例、片膝を立てて両足の裏を合わせた輪王坐とするが、醍醐寺に伝来する十世紀頃の如意輪観音像（図8）は、片足を踏み下げた半跏の姿をとる。

醍醐寺の本尊如意輪観音像が二臂であったという記事、そして、片足を踏み下げた特異な六臂如意輪観音像が伝わることから、石山寺や東大寺において片足を踏み下げた二臂像が「如意輪観音」と

称された背景に、醍醐寺僧の如意輪観音信仰が密接に関わっていたことが推察される。

以上のことをふまえると、醍醐寺と関わりの深い僧が石山寺や東大寺に進出する際、本尊もしくはその脇侍といった重要な位置を占める仏像を、如意輪観音と称した可能性が高い。平安時代から鎌倉時代にかけての石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍に関する史料は乏しく、具体的なことは不明であるが、その背景に如意輪観音に対する特別な信仰があったことは確かであろう。

さらにとりわけ九世紀以降、天皇や貴族が密教修法を重視したことにより、顕密兼修が必要とされ、南都諸大寺も密教化をせまられていた。<sup>47</sup> 当時の仏教界を取り巻くこのような状況の中で、東大寺や石山寺の意図と醍醐寺側の意図が一致し、特異な二臂如意輪観音像の成立に至ったのではないだろうか。そして、これらの像の「如意輪観音」という呼称が後世まで踏襲されたのは、醍醐寺の如意輪観



図9 中宮寺本尊

音に対する信仰が、石山寺および東大寺に浸透したことの表れであるといえよう。

## 五 半跏思惟形の如意輪観音像との

### 影響関係について

なお、奈良・中宮寺本尊(図9)をはじめとする半跏思惟像の中にも、如意輪観音と称されるものがある。しかし半跏思惟像を如意輪観音であると説く経典は見当たらず、日本以外に確実な作例を見出すことができない。よってこれらの像も、石山寺本尊タイプの如意輪観音像と同様、日本において成立した特異な二臂如意輪観音像として注目されてきた。

いずれも中宮寺、広隆寺、四天王寺といった聖徳太子ゆかりの寺院に伝わる半跏思惟像であり、聖徳太子と如意輪観音を同体とみる信仰によって、如意輪観音と称されたものと考えられてきた。<sup>48</sup> しかるに、そのような特殊な信仰の成立事情や、これが半跏思惟像の尊名と結びついた経緯については、従来、明らかにされてこなかったのである。

筆者は前稿において、これらの半跏思惟像の尊名に関する文献史料を精査し、十二世紀後半から十三世紀にかけて、醍醐寺と密接に関わる僧たちが、如意輪観音とよび始めたことを明らかにした。<sup>49</sup> 特に、中宮寺、広隆寺、法隆寺の半跏思惟像は、醍醐寺出身で真言律

四天王寺救世観音像  
 聖如意輪  
 仍私加す



図10 『別尊雑記』四天王寺金堂本尊

宗の祖としても名高い、叡尊（一一二〇一〜一一二九〇）の影響を受けた僧たちによって、如意輪観音とよばれたことが判明した。

さらに、半跏思惟像を如意輪観音と称するもつとも早い史料が、十二世紀後半の『別尊雑記』であることを見出した。『別尊雑記』の如意輪観音の項には、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像である四天王寺金堂本尊の図像（図10）が収録され、その傍らに「私加之」、つまり「（この図像を）編者が私的に（如意輪観音の項に）加えた」

一五〇〜一一二〇二）らの周辺で聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と結びつけられた可能性を指摘した。

ここで重要なのは、すでに述べた通り、『別尊雑記』の編纂に関わった守覚が、石山流を継承している点である。守覚の周辺で半跏思惟の姿をした特異な二臂如意輪観音像が創案されたとすれば、そのイメージの源のひとつとして、石山寺本尊「如意輪観音」像があったのではないだろうか。すなわち半跏思惟形の如意輪観音像と

との注記がみえる。これは、編者が私的に半跏思惟像を如意輪観音と称した、ということと同義であり、すなわち編者である心覚（一一七〜一一八〇頃）や守覚（一

石山寺本尊タイプの如意輪観音像が密接な影響関係にあったことが推測されるが、現時点では史料が不足しているため、さらなる課題とした<sup>(31)</sup>。

## むすび

本稿ではまず、東大寺大仏左脇侍が如意輪観音と称され始めた時期、淳祐と密接に関わる真言僧が相次いで東大寺別当に就任していることに注目した。淳祐は如意輪観音を特別に信仰する醍醐寺の僧であり、石山寺本尊を如意輪観音と称することに関わったとみられる人物である。すなわち左脇侍の尊名変更にも、淳祐の如意輪観音信仰が影響を及ぼしていた可能性が高い。

また、石山寺本尊を如意輪観音であると記す図像集の編者たちもまた、淳祐を祖とする石山流を継ぐ真言僧であったことが判明した。なかでも『別尊雜記』の編者である守覚の周辺で、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されており、これら半跏思惟形の如意輪観音像が、石山流との関わりの中で生み出されたことも推察される。

なお根立研介氏により、院政期、仏事や新造の堂宇の本尊として、あえて靈驗性の高い古仏を求める事例が顕在化したことが指摘されている<sup>(32)</sup>。東大寺大仏左脇侍や石山寺本尊はいずれも古仏であり、この時期にこれらの像があらためて注目され、「如意輪観音」という

新たな意味づけがなされたことは、古仏への回帰の問題と相通ずるものと考えられる。

今後、これら特異な二臂如意輪観音像への信仰の具体的な様相、および十二世紀以降に盛行した図像集の編纂と石山流の関わりについて、さらに詳しく追究してゆきたい。

## 注

- (1) 田辺三郎助「江戸時代再興の東大寺大仏脇侍像について」(『仏教美術』一三一、一九八〇年)。
- (2) 『大正新脩大藏經』図像部卷三、二八c。なお石山寺本尊の像容について、『図像抄』の同記事の前後には、この他二種の姿が説かれる。一つは左手に蓮華を持ち右手を說法印とする、『如意輪陀羅尼經』に基づく姿である。ところがこの形式は「石山寺像頗有相違。」として同記事内ですぐに否定されている。また、石山寺焼亡の際に寺僧が拝見した姿として、左手を膝上で与願印とし、右手に宝珠を載せた蓮華を持っていたことも記される。井上一稔氏は、石山寺本尊はもともと施無畏印・与願印を結んでいたが、後にこの右手に宝珠付蓮華をもたせ、如意輪観音としたのではないかと推測している。そして三種の像容に関する記述について「本来如意輪観音でなかった像が、ある時期より、如意輪観音であるとされるに至り、經説との差異を埋めるために払われた努力」が現れたものであると述べている(『奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像―石山寺像を中心に―』『美術研究』三五三、一九九二年)。
- (3) 猪川和子「石山寺本尊如意輪観音菩薩像」(『美術研究』二七二、一一九七〇年)。
- (4) 福山敏男「石山寺・保良宮と良弁」(『寺院建築の研究』中、中央公論美術出版、一九八二年)。なお、造像の状況を伝える正倉院文書中の天平宝

字六年(七六二)八月二十七日付「造石山院所勞劇帳」には、「奉造埵觀世菩薩一軀、高一丈六尺」とあるだけで、像の具体的な像容については言及していない。

- (5) 猪川和子「岡寺如意輪觀音像」(『MUSEUM』三三〇、一九七七年)。  
 (6) 猪川氏前掲注5論文。  
 (7) 『大正新脩大藏經』卷二〇、二二三b。  
 (8) 井上一稔「日本の美術三二二 如意輪觀音像・馬頭觀音像」(至文堂、一九九二年)。  
 (9) 『大正新脩大藏經』卷二〇、一九三b。  
 (10) 田村寛康「奈良時代東大寺盧舍那仏の兩脇侍像について」(『仏教芸術』一一〇、一九七八年)。  
 (11) 井上氏前掲注2論文。なお氏は、従来奈良時代の如意輪觀音信仰と考えられてきたものが、觀音に付属する如意宝珠やその陀羅尼の威力への信仰であったことを明らかにした。また正倉院文書中に、石山寺本尊の胎内に舍利を奉納したとみえることに注目し、大智度論等の舍利と如意宝珠を同体とみる説をふまえ、如意宝珠の力をもつ觀音を表現した像であるとした。すなわち石山寺本尊は造立当初は觀音であったが、後に密教の伝来によって、如意宝珠の力を代表する觀音が如意輪觀音であるということが定着した段階で、如意宝珠と関わりの深いこの像も、如意輪觀音と称されるに至ったという。なお奈良時代の如意輪觀音信仰の唯一の例外として、『南天竺波羅門僧正碑并序』にみえる、菩提遷那による「如意輪菩薩像」の造像を挙げている。
- (12) 田村氏前掲論文。
- (13) 紺野敏文「虚空藏菩薩像の成立(下)―東大寺大仏殿脇侍像と講堂像をめぐって―」(『仏教芸術』二二二、一九九七年)。泉武夫「日本の美術三八〇 虚空藏菩薩像」(至文堂、一九九八年)。ただし、虚空藏求聞持法の本尊は左手に宝珠を載せた蓮華を執るが、右脇侍の左手の印相や持物を明確に伝える史料がないため、はっきりとしたことはわからない。なお、

『七大寺巡礼私記』に右脇侍の「頂」に「有三十五化仏」と記され、『觀虚空藏菩薩經』の「此天冠中、有三十五仏像現」という記述と一致することが注目されている。

- (14) 小野玄妙「東大寺盧舍那仏の右脇侍虚空藏菩薩私考」(『考古学雑誌』六一四、一九一五年)。  
 (15) 田村氏前掲論文、泉氏前掲書。  
 (16) 『七大寺日記』、『七大寺巡礼私記』、『興福寺流記』なお、興福寺東金堂後戸の釈迦像の兩脇にも、觀音と虚空藏が配されていたとの記録がある。  
 (17) 福山敏男「石山寺の創立」(『寺院建築の研究』中、中央公論美術出版、一九八二年)。猪川氏前掲注3論文、井上氏前掲注2論文。  
 (18) 『大正新脩大藏經』圖像部卷三、一三三c。  
 (19) 岩田茂樹「石山寺の彫像―本尊二臂丈六觀音像を中心に―」(『觀音のみてら 石山寺』奈良国立博物館、二〇〇二年)。徳竹由明「石山寺開基伝承の形成」(『日本文学』五二一三、二〇〇三年)。なお、『石山寺縁起』は聖宝と觀賢も石山寺座主として同寺に止住したと伝えるが、徳竹氏はそれ以前の史料で両者を石山寺と結びつける史料が見当たらないことから、信憑性に欠けるとする。
- (20) 『醍醐寺新要録』卷一「延命院篇」(醍醐寺文化財研究所編『醍醐寺新要録』上巻、法藏館、一九九一年)。  
 (21) 井上氏前掲注2論文。  
 (22) 「如意輪觀音六臂。当三六觀音并六道事」(『大正新脩大藏經』七八、三七二b)。  
 (23) 徳竹氏前掲論文。  
 (24) 井上一稔「新出・石山寺木造如意輪觀音坐像をめぐって」(『博物館学年報』三五、二〇〇三年)。  
 (25) 福山氏前掲注17論文。  
 (26) 宮本忠雄「仏像と絵画の莊嚴」(『石山寺の信仰と歴史』鷲尾遍隆監修・綾村宏編集、思文閣出版、二〇〇八年)。

(27) 近藤謙「石山寺兜跋毘沙門天像に関する一試論」(『仏教大学大学院紀要』三三、二〇〇四年)。

(28) 『東大寺要録』別当章、『東大寺別当次録』。

(29) 永村眞「真言宗」と東大寺―鎌倉後期の本末相論を通して―(『中世寺院史の研究』下、中世寺院史研究会編、法蔵館、一九八八年)。

(30) 『本朝高僧伝』九、『伝灯広録』中。

(31) 『野沢血脈集』

(32) 平岡定海「平安初期における真言密教の南都進出について」(『結城教授頌寿記念 仏教思想史論集』大蔵出版、一九六四年)。堀池春峰「弘法大師と南都仏教」(『南都仏教史の研究』上 東大寺編)法蔵館、一九八〇年。永村眞「第一章第一節 三「真言宗」別当の受容」(『中世東大寺の組織と経営』塙書房、一九八九年)。

(33) 平岡定海「東大寺の寺院構造について」(『日本寺院史の研究』吉川弘文館、一九八一年)。

(34) 淳祐の著作『要尊道場観』中の「虚空藏菩薩道場観」(『大正新脩大藏經』卷七八、五一c)には左手に如意宝珠、右手を与願印とする虚空藏菩薩が説かれ、以後、これが真言宗内で継承されてゆく(泉氏前掲書)。

(35) 建久四年(一一九三)頃の醍醐寺本巻一の奥書に「保延五年秋此奉為上皇草集之 前少僧都 永嚴」とあることから、編者を永嚴とする説もあるが、同じく鎌倉初期の常楽院本巻二には「真実二ハ恵什阿闍梨集之」とあり、当時からすでに諸説あったことが知られる。この問題について詳細な検討を行った田村隆照氏は、恵什が永嚴の命を受けて編纂したとの結論を述べている(『圖像抄―成立と内容に関する問題』『仏教芸術』七〇、一九六九年)。

(36) 『別尊雜記』卷第一八「如意輪」(『大正新脩大藏經』圖像部卷三、二二〇c)、『覺禪抄』卷第四九「如意輪下」(『大正新脩大藏經』圖像部卷四、八八一b)。

(37) 『別尊雜記』の編者は心覚であるが、阿部泰郎氏は守覚と心覚の密接な

関係や当時の状況をふまえ、守覚もまた編纂に関わっていたことを指摘した(阿部泰郎「守覚法親王における文献学」『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社、一九九八年)。

(38) 真鍋俊照「心覚と別尊雜記について―伝記および画像「私加之」の諸問題―」(『仏教芸術』七〇、一九六九年)。錦織亮介「別尊雜記の研究 その成立問題を中心にして」(『仏教芸術』八二、一九七一年)。

(39) 清水善三「覺禪抄における各巻の構成とその成立過程」(『仏教芸術』七〇、一九六九年)。

(40) 中野玄三「石山寺観祐と密教図像」(『続日本仏教美術史研究』思文閣出版、二〇〇六年)。

(41) 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」(『日本建築史の研究』桑名文星堂、一九四三年)。

(42) 『三宝絵』に載せる開基伝承は、以後、『扶桑略記』、『今昔物語集』、『東大寺要録』、『七大寺巡礼私記』等、諸書に少しずつ変容しながら採録されてゆくという(徳竹氏前掲論文、藤巻和宏「寺社縁起とお伽草子―東大寺縁起・石山寺縁起をめぐって―」『三宝絵を読む』小島孝之・小林真由美・小峯和明編、吉川弘文館、二〇〇八年)。

(43) 徳竹氏前掲論文。

(44) 『醍醐寺根本僧正略伝』(『群書類従』卷八下)。

(45) 『醍醐雜事記』卷一(中島俊司編『醍醐雜事記』醍醐寺、一九三二年)。

(46) 『醍醐寺新要録』上「如意輪堂編」(注20前掲書)。

(47) 藪田香融「平安仏教の成立」(『密教体系』六 日本密教Ⅲ)法蔵館、一九九五年)。

(48) 内藤藤一郎「夢殿秘仏と中宮寺本尊 一―四」(『東洋美術』四、五、六、八、一九三〇―一九三一年)。

(49) 拙稿「半跏思惟形の如意輪観音像の成立をめぐって―醍醐寺との関わりを中心にして―」(『美術史研究』四六、二〇〇八年)。

(50) 右手は施無畏印ともみえるが、十三世紀の『聖徳太子伝私記』裏書に

「以左手ヲ請御顔」(ただし左右の手は逆)とあり、思惟相を示すものと解されてきた。

(51) 両者の関係を考える上で、さらに注目すべきは、聖徳太子信仰の問題である。弘長三年(一二六三)に石山寺衆徒らによって注進された『石山寺流記』には、石山寺本尊について「或説聖徳太子第二生御本尊云々」とあり、石山寺本尊と聖徳太子の関係を語られる。しかし、『石山寺流記』以前に石山寺の開基を伝える『三宝絵』や『七大寺巡礼私記』等では、聖徳太子と石山寺の結びつきが確認できない。

ここで注目したのは、石山寺本尊と叡尊の関わりである。すでに述べたように、石山寺本尊は承暦二年(一〇七八)に焼失している。その再興については時代の下る史料しか伝わらず、江戸時代の『石山寺年代記録』や『石山要記』に、「興正菩薩」つまり叡尊が十三世紀に本尊を再興したとある。

しかし、現在の石山寺本尊は十一世紀ごろの様式を示していることに加え、『金剛仏子感身学正記』をはじめとする叡尊の伝記類に、石山寺に關与したという記録が見当たらないことから、叡尊が本尊を再興したとするこれらの記事は、信憑性のないものとして、これまで重要視されてこなかった。

その一方で近年、石山寺本尊の胎内から水晶製の五輪塔が発見された。地輪と火輪の平面が六角形を呈するが、これは叡尊の周辺で多くみられる五輪塔の特徴である。この五輪塔を納めた木製厨子には、寛元三年(一二四五)に石山寺座主実位が奉安した旨が墨書されている。実位の師は、醍醐寺報恩院流の祖として知られ、醍醐寺座主をつとめた憲深(一一九二～一二六三)である。叡尊と憲深は同時期に活躍した醍醐寺僧であり、実位が叡尊の影響を受けていたことも想定できる。また、叡尊が復興しその活動の拠点とした西大寺に、石山寺旧本尊の前立とかなり近い形式の二臂如意輪観音像が伝わることも注目される。これらの遺品、および『石山要記』や『石山寺年代記録』の記事は、十三世紀に叡尊、あるいは叡尊と密

接な関係にある人物が、何らかの形で石山寺本尊に関わったことを示唆するものとも考えられる。

重要なのは、『石山寺流記』において石山寺本尊と聖徳太子が結びつけられたのも、同じく十三世紀であったことである。前述の通り、叡尊は聖徳太子ゆかりの半跏思惟像を如意輪観音と称した可能性の高い人物であり、例えば聖徳太子廟で如意輪根本大呪を唱える(『金剛仏子感身学正記』正嘉二年条)など、聖徳太子と如意輪観音を同体とみなす信仰を有していたことで知られている。他方、叡尊と直接的な関わりのない東大寺大仏左脇侍や岡寺本尊は、この時期に聖徳太子信仰と結びついた形跡がない。すなわち石山寺本尊「如意輪観音」像が聖徳太子と結びつけられた背景に、叡尊の信仰が密接に関わっていたことが想定できる。つまり叡尊は半跏思惟タイプと石山寺タイプの如意輪観音像のいずれとも深い関係にあった可能性があるが、現時点では史料が乏しいため、今後の課題としたい。

(52) 根立研介「附論 後白河・後鳥羽院政期の古仏の使用をめぐって」(『日本中世の仏師と社会』塙書房、二〇〇六年)。

#### 図版出典

- 図1 泉武夫『日本の美術三八〇 虚空蔵菩薩像』(至文堂、一九九八年)。  
 図2 『日本絵巻大成四 信貴山縁起』(中央公論社、一九七七年)。  
 図3 『天正新脩大藏經 図像部卷三』。  
 図4・5・8 『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』(至文堂、一九九二年)。  
 図6 伊東史朗『日本の美術四七九 十世紀の彫刻』(至文堂、二〇〇六年)。  
 図7 鷲尾遍隆監修・綾村宏編集『石山寺の信仰と歴史』(思文閣出版、二〇〇八年)。  
 図9 『中宮寺 如意輪観世音菩薩』(中宮寺、二〇一〇年)。  
 図10 『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』展実行委員会編『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』、一九九二年。